



第8回

# まちのスーパーヒーローたち

## 民俗部門

時代劇で有名な「め組」は、江戸時代の町火消し。現代の消防士のような存在です。明治から昭和初期にかけては「消防組」として、まちの人々に慕われていました。

今回は、そんな消防組について紹介します。

問合せ／市立博物館 ☎226-6521



▲消防組第一部の人々(大正時代、『水戸百年』より)

明治27(1894)年、政府が「消防組規則」を制定し、水戸市でも第一部(第六部(上市部)、第七部(第十一部(下市部))の消防組が組織されました。部ごとに若干名の小頭と、全体で300名ほどの消防組の指揮を執る組頭が1名配置されました。

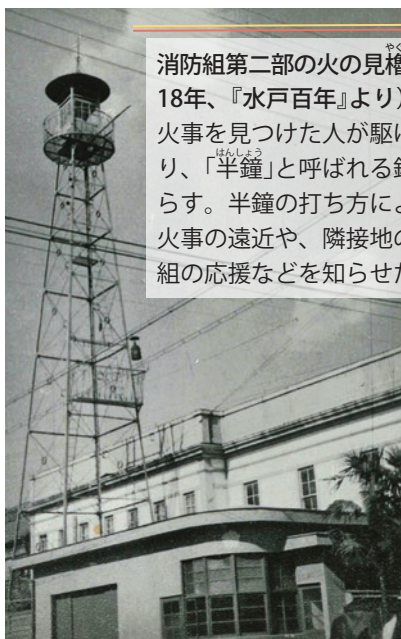
当館所蔵の消防組の資料は、消防組第一部(現在の末広町周辺で活動)のもので、小頭が消防手たちに指示を出すときに使われた手鷲や、火事場で身につまわした刺子半纏などを展示しています。

刺子とは、火を通りにくくするために、厚手の木綿の布地を何枚も重ねて縫ったものです。これだけでもかなりの重さがあるのですが、火事場に行くときには、これを着てから、水をかぶって出勤しました。また、現代のような消火設備もない時代です。火を消すよりも、風向きや火の勢いを考慮しながら、近くの家々を破壊して延焼を防ぐ方法が取られていました。重量のある水運車や手押しポンプを引っ張り、水を含んだ重い刺子を身につまわすの消火活動は、さぞかし困難を極めたことでしょう。

夜には、人々に注意を促すために、拍子木を打ちながらまちを歩く「夜廻り」も行いました。さらに、火事で焼け出された人を「火事見舞い」として訪問し、励ますことも消防組の仕事でした。

命を懸けて火事場に臨んだ消防組の消防手たち。住民たちからの信頼も厚く、火災や洪水などの災害時だけではなく、祭りや冠婚葬祭にも采配を振るなど、地域の人々の生活に深く関わっていました。その姿はまさに、当時の人々にとってスーパーヒーローと言える存在であったことでしょう。

(水戸市立博物館民俗部門学芸員 坂本京子)



消防組第二部の火の見櫓(昭和18年、『水戸百年』より)  
火事を見つけた人が駆け上がり、「半鐘」と呼ばれる鐘を鳴らす。半鐘の打ち方によって、火事の遠近や、隣接地の消防組の応援などを知らせた。

刺子頭巾

手鷲

刺子半纏・腹掛け

刺子手袋

わらじ

手鷲は、柄の短い鷲口のこと。鷲口は、屋根の瓦などを引っかけて家々を破壊するために用いられていた。わらじは、滑りにくく身軽に動きやすいため、火事場で履かれた。

